

# 「汝、何のためにそこにありや」に 支えられた編集者人生

佐々木 広人（平成2卒）



「汝、何のためにそこにありや」は、かつて秋高の校長を務めた鈴木健次郎先生が生徒に贈った言葉として、卒業生の間では知られている。私は四半世紀ほど、編集者として思いもよらぬ大ヒットに恵まれたが、その支えになったのがこの言葉だった。

## 「ダジャレで思いついた『終活』」

たとえば、週刊朝日の編集者時代に考案した「終活」。きっかけは義理の両親と千葉県内の寺院を訪れたことだった。樹木葬を決め、生前に戒名を授かる。死の準備と想像すると暗く感じるが、寺院では年配者たちがむしろすっきりした表情で敷地内の田畑を耕したり、散策したりと、実に明るい世界が広がっていた。この明るさを表すべく、ダジャレで思いついたのが、就活（就職活動）ならぬ「終活」だった。幸いにも「終活」で2012年の新

語・流行語大賞トップテンを受賞できた。だが、言葉を創るのはむしろ簡単で、重要なのは企画化して多くの人に親しんでもらうことにある。そのため、私は周囲の人たちへの聞き取りを重ねた。重視したのは本音を引き出すこと。「話を聞くぞ」とばかりに目の前でメモを取るのには、相手の警戒心を募らせる。環境を整え、相手の愚痴を聞くつもりで心の声を拾った。そこにこだわる理由は「他との差別

化」を図りたいからだ。前出の「汝、何のためにそこにありや」は自分の存在意義を問うこと。では、汝を自分の仕事に置き換えたらどうか？ その記事や商品の存在意義、つまり獨創性や差異を問うことになるのだ。

2014年、私は「アサヒカメラ」の編集長に就任した。同誌は1926年創刊の国内最古の写真・カメラの月刊誌。長年の部数低迷と広告不振もあり、その先行きが危ぶまれていた。事実、私は社長にこう言われた。「君が最後の編集長になるかもね」

## 「崖っぷちのアサヒカメラでヒット連発」

当の私は写真やカメラを知らない素人。しかも、歴史が長いアサヒカメラは根強いファンが多く、広告主、読者がそれぞれ「アサヒカメラ的なもの」をイメージしていた。

それでも生まれ変わらねば、事態は変わらない。やはり誌面を刷新して再出発を図るしかなかった。ここでも私は写真愛好家への聞き取りを徹底。現役の読者に加え、元読者、同誌を買ったことがない写真好きにも範囲を広げた。5年間の編集長在任中、話を聞いた相手はのべ2000人に達しただろうか。

迷いはなかった。何しろ雑誌を買うのは読者である。寄り添い、たくさん